

明治時代から昭和時代までの女学生の通学服に求める 機能の変化

Changes in the Functions of School Clothes of Female Students from the Meiji Period
to the Showa Period

多 屋 淑 子* 笠 原 里 美*
Yoshiko TAYA Satomi KASAHARA

要 約 本研究は、明治時代から昭和時代にかけての女子教育の変遷と、それぞれの時代の女学生の通学用の服装について資料から調べ、各時代の女学生の通学服に対して求める機能がどのように変化をしたかについて検討した。高等女学校、女子高等師範学校、女子専門学校の女学生の通学時の服装を文献から調査し、制服と設定されるまでのプロセスも検討した。一方で、制服を設定しない学校もあり、その一例として、日本女子大学附属高等女学校及び日本女子大学校における女学生の服装に焦点を当て、日本女子大学校の卒業生団体である桜楓会の機関紙『家庭週報』に記載されている記事から、制服に対する考え方を把握した。その結果、女学生の通学服に求める機能は、時代の状況に合わせて優位性が異なり、機能面、衛生面、経済面、意匠面の順に訴求される機能に変化してきたことがわかった。

キーワード：女子教育、女学生、通学服、制服、家庭週報

Abstract This study examines changes in the functions of female students' clothes from the Meiji period to the Showa period by studying the changes in female education and referring to documentary material on female school clothes during these periods. Literature on school clothes worn by students at girls' high schools, higher normal schools, and vocational colleges was surveyed, and the process by which uniforms were specified was studied. Schools like the Japan Women's University High School and Japan Women's University did not have specified uniforms. This study focused on female clothes at these schools and it studied attitudes towards uniforms based on articles in Home Weekly, the official publication of Ofukai, the alumni group of Japan Women's University. Results indicated that the functions of female school clothes have changed depending the circumstances of the period, and the functional appeal has changed from functionality to hygiene, economy, and then design.

Key words : Female education, Female student, School clothes, School uniform, The Home Weekly

1. はじめに

現在、中学校・高等学校では制服を制定している場合が多く、学校により様々な制服がある。本研究では、女子教育に焦点をあて、明治時代から昭和時

代の中等教育機関である高等女学校と、高等教育機関である女子高等師範学校、女子専門学校の女学生の通学時の服装の変遷から、制服がどのように設定され、どのような機能を必要としてきたかを検討することを目的とする。また、制服を制定していない学校においては、その背景をたどり、通学時の女学生の服装の変遷と服装の考え方を検討する。

* 被服学専攻
Division of Clothing

2. 女子教育の確立

1872(明治5)年に制定された学制では、女子教育に関する規定は定められなかったが、女子も男子と同様に教育を受けることが望ましいとされた。1879(明治12)年の教育令、1880(明治13)年の改正教育令、1886(明治19)年の小学校令で義務教育の文言が初めて登場した。文部省『学制百年史(資料編)』の教育統計¹⁾より作成した Fig. 1 の男女の就学率から、義務教育が制定されたにもかかわらず男女差が大きく、当時の女子教育の遅れが明らかである。1890(明治23)年に第二次小学校令、1892(明治25)年に中学校令改正と師範学校令改正によって教育制度が整えられ、1897(明治30)年に師範教育令、中学校令、1899(明治32)年に高等女学校令などが公布されたことで、Fig. 2²⁾ の教育体制が整備された。これにより男女の就学率は90%以上となり、義務教育における女子教育が位置づけられたと言える。

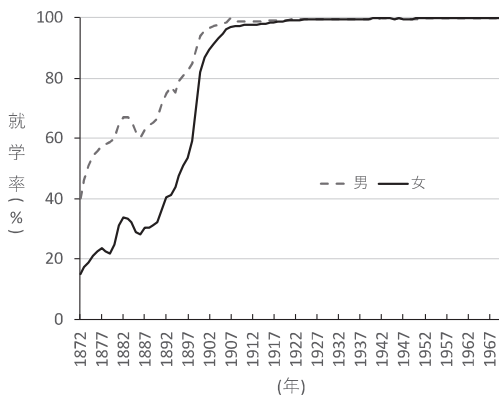


Fig. 1 Enrolment ratio of male and female in compulsory education

義務教育となった尋常小学校を卒業した女子の中には、高等小学校や高等女学校に進学した者もいた。Fig. 3 は、当時の中等教育に在籍した男女別の人数の推移であり、学制の制定後から現行の教育体制になる終戦までの文部省『学制百年史(資料編)』の教育統計³⁾より作成した。男子は旧制中学校、女子は高等女学校と当時の中等教育に在籍した人数である。ここで、中等教育に在籍した女子の生徒数は、1881年度までは女子が旧制中学校に在籍し、1882(明治15)年度は旧制中学校または高等女学校のいずれかに在籍していることから、前者は旧制中学校の女子の生徒数を使用し、後者は両者を合算した数値を使

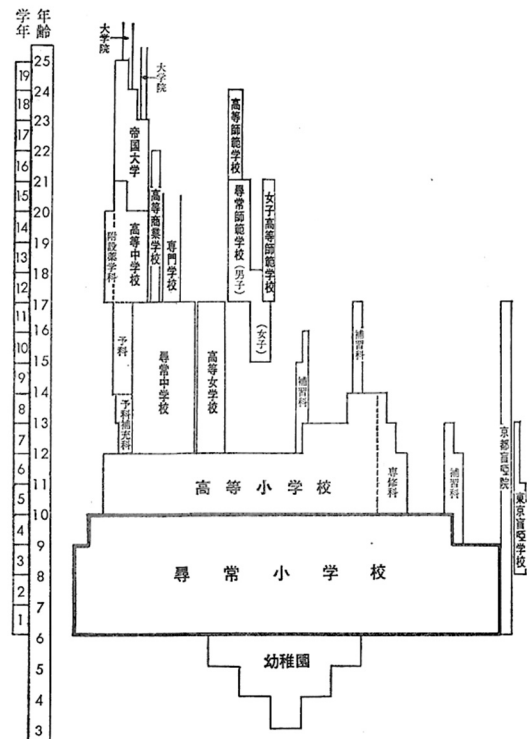


Fig. 2 School system diagram in 1892

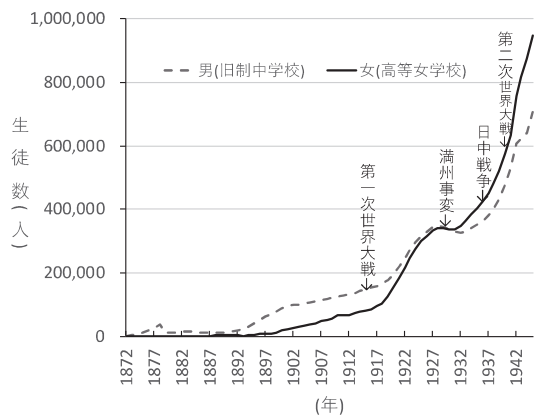


Fig. 3 Number of male and female students enrolled in secondary education

用した。ちなみに、1883年度からは女子の中等教育は高等女学校に在籍のみのデータとなった。これにより、教育制度が整ってきた1900(明治33)年に着目すると、女子の生徒数は男子の約1/5(女子: 17,540人/男子: 88,391人)であり、多くの女子は高等女学

校に進学することができなかったことが明らかである。第一次世界大戦後に女子教育が急激に普及し、1930(昭和5)年頃には、女子の生徒数が男子の生徒数とほぼ同数となり、それ以降は、満州事変や日中戦争、第二次世界大戦の影響により、男子と女子の生徒数が逆転し、女子が男子を上回る数であったことが観察できる。次に、高等女学校卒業後に女子が進学できる教育機関は、男子の高等教育に値する女子高等師範学校や女子専門学校であった。Fig. 4は、女子の中等教育と高等教育の在学者数について、当該年齢の人口に占める比率を文部省『日本の成長と教育－教育の展開と経済の発展－』の教育統計⁴⁾をもとに作成したものである。高等教育を受けた女子は、中等教育の女学生の数に比べて、非常に少なかったことがわかる。

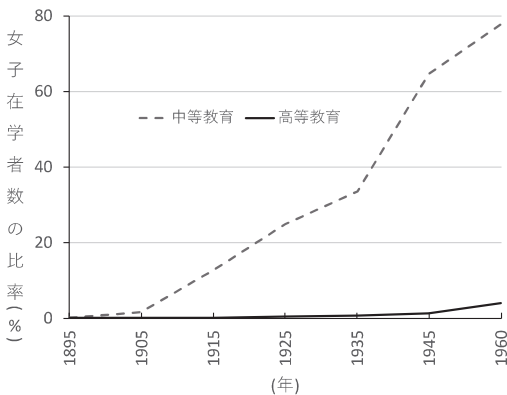


Fig. 4 Ratio of enrolled female students out of the population of that age

3. 女学生の制服の変遷と制服に求める機能

女学生の学校制服の変遷を検討するに際し、『学制百年史(記述編)』に記載されている時代区分⁵⁾を参考に、近代教育制度の創始期として1872(明治5)年から1885(明治18)年を第一期、近代教育制度の確立と整備である1886(明治19)年から1916(大正5)年までを第二期、教育制度の拡充である1917(大正6)年から1936(昭和11)年までを第三期、戦時下の教育である1937(昭和12)年から1945(昭和20)年を第四期とし、さらに終戦後の1946(昭和21)年から現在までを第五期とした。その区分毎に、当時の資料を用いて、女学生が求めている通学用の衣服について検討した。

3-1. 近代教育制度の創始期の通学服

(1872(明治5)年～1885(明治18)年)

(1) 男袴

明治維新後は、政府は女子の教育を男子の教育と同様に行うことが近代教育の特色であるとして奨励したため、女学校が次第に発達した。しかし、全般的には、江戸時代以来の女性観の影響も強く、女子の学校は男子の学校に比べて著しく遅れて発達した。中等教育機関にあたる女学校の前身は、1872(明治5)年に新しい時代の女学校の模範として設立された東京女学校であり、当時は最も整備された日本で最初の官立の女学校であった。1874年(明治7)に女子高等師範学校が設置され、翌年に開校された。女学生は、1877(明治10)年に撮影されたFig. 5⁶⁾に示すように、男袴を着用していたことがわかる。男袴の着用は、政府が女学生に対して特別に認めたことから始まった⁷⁾とされる。当時は、女学生用の特別な制服や女性用の袴がなかったこともあり、普段着用の和服は裾が乱れやすいことから、女学生は男袴を着用したのであろう。女子が男袴を履き、颯爽と歩く姿は、明治期の日本社会においては、現在では想像を絶するほどの「新しさ」として注視されたことであろう。この装いを、女学生自身がどのように感じ



Fig. 5 Men's Hakama

ていたのかを知りたいところであるが、当時は多くの人から非難の目で見られたようである。1875年10月8日の新聞記事⁸⁾には、「(前略)女子といふものは髪形から着物までも艶らしく総てやさしいのが宜しいとおもひますに此節學校へかよふ女生徒を見ますに袴をはいて誠に醜くあらあらしい姿をいたすのはどういふものでありますか(中略)男袴は廃にしてはどうでございます」と記載され、男袴姿が当時の世間が求める女子像にそぐわず、「醜い」「あらあらしい」姿として注目されていたことが明らかである。ちなみに、男袴は批判が多かったことから1883(明治16)年には廃止されている⁹⁾。このように、1872年に女子教育がスタートし、新しい希望を持ち勉学意欲に溢れていた女学生に服装による批判が集中することとなり、服装問題の解決は、女学生にとっては大きな課題であったであろう。おそらく、この時ほど、他に相応しい服装の出現を望んだことはなかったであろうと推察する。この例から、着用衣服の外観から発信されるイメージは、時としては、着用者自身とは異なる内容で第三者に伝わる可能性が非常に大きいことを示している。制服を決定する時には、このことを十分に考慮する必要があることがわかる。

(2) バッスルスタイル

1886(明治19)年に高等師範学校女子部に通っていた女学生の服装は、Fig.6¹⁰⁾に示されるようにバッスルスタイルを着用しているが、その特徴である細いウエストやバストの強調が見られないことがわかる。明治政府は西欧文明を速やかに吸収して欧米人と対等の外交を求める為に努力し、明治10年代後半の鹿鳴館時代になると、上流階級の間だけでなく、当時の女学生の流行として、スカートの後ろ部分を杵状下着によって誇張し、胴部をコルセットで締め上げ、バストとウエストに強弱を見せるバッスルスタイルが普及した¹¹⁾。しかし、女学生のバッスルスタイルはコルセットを使用していなかったと考えられている¹²⁾。このバッスルスタイルは、西陣や足利の高級な絹素材や輸入の装飾品を使用するために高価格である¹³⁾ことや、当時の新聞雑誌によって取り上げられたコルセットによる身体衛生上の問題¹³⁾により、次第に女学生には着用しなくなったようである。このように女子教育が導入された時期の服装は、前述の男袴に観る男性用の衣服の模倣は止め、女性用の流行の衣服が着用されるようになったものの、身体衛生上の問題や価格の点から女学生の服装として

定着するに至らず、適切な衣服を模索している状況であった。女学生の服装の条件として、健康を維持することと適切な価格であることが求められていたことがわかる。



Fig. 6 Bustle style

3-2. 近代教育制度の確立と整備期の通学服 (1886(明治19)年～1916(大正5)年)

(1) 女袴

明治30年代の初頭には、諸学校制度の改革を行ったが、その際に、高等女学校に関してもこれを独立の学校令によって規定し、中学校令から分離させることとした。1899(明治32)年2月8日には、従来の高等女学校規程を改めて、新たに「高等女学校令」を公布した。ここにおいて、女子中等教育機関は独立の学校令をもち、それにより設置運営され、内容も整備されることとなり、その後、高等女学校が著しい振興を見せた。女子中等機関のほとんどが高等女学校であり、教育内容は、中流以上の社会の女子の教育であり、「良妻賢母主義」の教育であった。このように女子の教育制度が整い始めたと同時に女学生数が増加傾向になり、1899(明治32)年以降になると、着物の上に行灯袴と称されるスカート状の女袴姿が一気に広がるようになった。各学校の生徒を識別するために、袴の色は黒や紺などの様々な色が登場し、袴の色は、当時華族が用いていた高貴な色の紫に代わり、海老茶(葡萄)色の「海老茶袴」が流行し、女学生は「海老茶式部」と呼ばれた。このことは、1872年から1883年までに女学生が着用した男袴は社会に受け入れなかったが、1899年以降の女学生の服装に対する呼称から推察すると、この時代の女学生の服装は好感を持って受け入れられたと見ること

ができる。Fig. 7¹⁴⁾と Fig. 8¹⁵⁾に示すように、和装と洋装の着装も可能であり、前者は長い袴・白足袋・草履の組み合わせであり、後者は短い袴・タイツ・革靴の組み合わせであった。このように、女袴は、明治時代後期までに女学生の代表的な服装として確立し、その後、和と洋の着装の区別だけではなく、袴の長さや袴の腰紐の結び方などの工夫がなされた。



Fig. 7 Japanese style



Fig. 8 Western style

女袴の機能の特徴は、男袴と同様に裾が乱れず、帯の締め付け感がなく、動きやすく、女性らしさの視点が考慮され、審美性に優れていることを特徴とし、かつ、勉学に相応しい服装である。この点が女子教育の初期に女学生が男袴を着用した時と異なり、女学生の勉学に必要な運動機能性と審美性を兼ね備えた衣服として進化し、女学生の制服に求められる基本的な性能が加えられた衣服となった。

(2) 改良服

1904(明治37)年から1905(明治38)年の日露戦争後は、女子教育を行う学校が著しく増設された。1910(明治43)年に高等女学校令の改正が行われ、高等女学校の他に、主として家政に関する学科目を修めようとする者のために実科高等女学校が成立した。戦時下の当時、生き抜くことができるよう女学生の身体を強くするための体育が重要視された時代であった。

女学生の衣服は、改良服が見られるようになる。Fig. 9-1¹⁶⁾のように袖丈が短く、袖口に紐を通して先を狭く縮めることができるようになってきている。これは、東京裁縫女学校の学生が1905(明治38)年に製作した実寸法の約1/3のミニチュア標本で、国の重要

有形民俗文化財の裁縫雛形である¹⁶⁾。筒状の袖は、従来の片袖分の布地で両袖ができると記述されている¹⁷⁾。他にも、Fig. 9-2¹⁸⁾のような改良服がある。これは、「(前略)女学生の袴の前後を割り、釦を以て掛け、下部に紐を通さば、我國舊來の縷袴と同型のものとなり、スウェーデン式体操スカートと大差なきものとなることを案出したり。」と描写され、考案の由来、裁ち方、製作上の理論、割出方、縫い方などの詳細な記載もある¹⁸⁾。具体的には、Fig. 9-1と Fig. 9-2から、スカートスタイルの女袴をズボンスタイルにして脚部を動きやすくし、上衣の袖は、腕が動きやすいパターンの袖に改良することにより布地も1/2に節約でき、さらに袖口を工夫して作業をしやすくしていることがわかる。

この時期の女学生の通学用の服装には、動きやすさと作業のしやすさを加え、体育の授業にも対応でき、機敏な動作に対応できる機能と、着やすくするためのパターンの検討と使用する布地の量の検討がなされ、初期の女袴に比べて、着心地や使い勝手の良さの視点からの改良が加えられた。



Fig. 9-1 Skirt style



Fig. 9-2 Pants style

Improvement in Japanese clothing

3-3. 教育制度の拡充期の通学服

(1917(大正6)年~1936(昭和11)年)

(1) 洋装 (ワンピース型)

大正時代に入ると、女学生の衣服は、学校毎の制服と洋装の服装の制服が登場する。その一例として、Fig. 10¹⁹⁾は、山脇高等女学校の制服として1919(大正8)年から着用されたワンピース型の制服である。このデザインは、山脇高等女学校の初代校長山脇房子が英国の女学生を参照して考案し、ワンピースが日本人の体型をカバーしていること、和服の帯の代わりにバックル付きのベルトを用いてウエスト部分を

締めて女性らしいスタイルとしていること、白襟と白カフスが取り外し可能で洗い替えがしやすいことを特徴としている²⁰⁾。この基本デザインは、現在の山脇学園の制服にも引き継がれている。この制服の訴求項目として、日本人の体型に合い、女性らしいスタイルで審美性も満足し、清潔さも維持できるという点が考慮されている。



Fig. 10 One-piece style (Uniform of Yamawaki girls' school)



Fig. 11 Two-piece style (Uniform of Fukuoka Jogakko)

(2) 洋装（ツーピース型のセーラー服）

1921(大正 10)年頃にはツーピース型のセーラー服も登場する。Fig. 11²¹⁾は私立女学校である福岡女学校のセーラー服の例である。ちなみに、セーラー服は、17世紀に、イギリスのエドワード7世が幼少期に水兵服を着た肖像画が評判となり、その後、子供服として普及し、20世紀には女性に流行して、日本にも女学生の制服として取り入れられた。1930年代にはセーラー服は全国各地に広がり、女子の学校制服として多く着用されるようになった。大正時代から昭和時代にかけては、女学生＝セーラー服と言われるほど、セーラー服が女学生の通学用の服装として社会に浸透した。

このように、この時代の女学生の通学服は和風スタイルから洋風スタイルに移行し、女学校も増加するに伴い様々なスタイルの制服が見られるようになってきた。この時代は、女学生の通学服は制服となり、制服が所属をあらわす機能を担い始めるようになった。

3-4. 戦時下の通学服

(1937(昭和 12)年～1945(昭和 20)年)

(1) 物資不足時代のセーラー服

1930年代には、県単位でセーラー服が統一され、満州事変(1931年)や日中戦争(1937年)によって軍需品に繊維製品が優先され、制服素材に変化が現れた²²⁾。1938(昭和 13)年以降、レーヨンのステープルファイバー(以下スフと記す)が、綿や羊毛の代用品として全国的に使用されるようになった。スフは、現代のレーヨン繊維に比べて品質が劣り、熱に弱く水に濡れると強度が弱くなり、伸びやすくなるため、「早くも6月には新入生の制服の肘やお尻部分が破れてきた」との記録²³⁾が残っている。以前は、女子教育や通学時の服装に関する批判や、男女平等でない教育制度に対する意見はあったが、このような女学生の通学服の取扱い方や着心地に言及するには及ばなかったことから、この時代の女学生の通学服の品質に対する要求が反映されていると捉えることができる。当時のセーラー服はスフ 100%または 30%以上の混用品であることから、着用中の型崩れや損傷が生じ、洗濯が頻繁にできないという状況であった。これに対応するため、襟・胸当て・カフス・ネクタイにスナップを付けるなどの工夫による改良が行われ、襟カバーや取り外し可能なカフスが取り付けられた²⁴⁾。このように、戦時下で品質の良くない素材で作られたセーラー服に対して、女学生は、型崩れや汚れを防ぐために衣服の取り扱いに諸々の工夫をしながら、丁寧に着る努力をしていたことがわかる。品質の良くない繊維製品を使用することとなった戦時下においては、女学生は、セーラー服へのあこがれ感を持ちつつ、着用中に型崩れやしわがよるなどのよれよれ感が出ないように取り扱い方法を工夫した時代であると考えられる。言い換えれば、制服への要求は、着用中に着崩れや損傷が生じないことや清潔さを維持できる機能が求められていることがわかる。

(2) ヘチマ衿のセーラー服

戦争が進むにつれて、1941(昭和 16)年になると、全国の女学生の制服を統一する動きが始まるようになった²⁴⁾。全国統一型の制服とは、Fig. 12²⁵⁾に示すように、ヘチマ衿の文部省標準服として全国で統一された服装であったが、文部省の通牒の実施上ノ注意事項において、「(前略) 3. 本統制ハ当該学校生徒ヲシテ齊ニ之ガ新調ヲ爲サシムルノ趣旨ニ非ズ即チ生徒ノ現ニ使用又ハ所持スル制服ニシテ之ガ使用又ハ利用スルコト能ハザルニ至リタルトキ本規格ニヨリ新調スベキモノニシテ苟モ新式ヲ好ミ舊式品ヲ

用フルヲ恥ヂ競フテ之ガ新調ヲ爲スガ如キ傾向ヲ將來シ爲メニ資源ノ濫費ニ陥ルガ如キコトナキ様萬全ノ方途ヲ構ズベキコト 4. 新入學生徒ニ付テハ入學前ノ學校ニ於テ使用シタルモノ或ハ兄姉等ノ用ヒタルモノアル場合ニ於テハ能フ限り之ヲ使用セシメ新調ハ避ケシムルコト(後略)」と、記されていた²⁶⁾。多くの女学生は、憧れのセーラー服を着用しようとした様子は、Fig. 13-1, 2, 3²⁷⁾の当時の気持ちを綴った文章から知ることができる。このように、政府によって定められたヘチマ衿の制服は、女学生にとって、おしゃれな制服に抱いていた憧れ感からは程遠い服装であり、物資が無く新調ができないという不自由さの中において、非常に不人気の制服であった。この時代の女学生は、憧れ感や自負心を満足させるセーラー服を求めている。

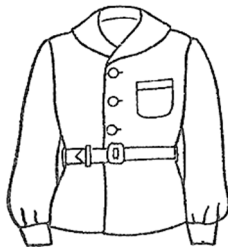


Fig. 12 Shawl collar

・私たちの回生から、女学生の制服はヘチマ衿の国民服というところになった。がっかりである。お姉さんのいる人は、お古のセーラー服を着てもいいのだった。セーラー服の胸脇をウエストに向かって細く縫い詰め、胸のリボンも、ふあ

Fig. 13-1

Fascination with the sailor's uniform

へちま衿の制服
織姫製品は目に見えて不足となり、この年から学生服も国
家で統制された。いわゆる国民服。女学生は白いへちま衿の
ついた紺色・前開きの上着。セーラー服とは似ても似つかぬ制
服。先輩のお下りのセーラー服をいただいて着たときの嬉
しかったことは忘れられない。
何と申しまして、ショックはヘチマ衿のバスガール服
だったことです。校章をつけましても、チキを入れましても、
も、さまじきではありません。そのうち十六年十一月八日、戦争に
突入してしまいました。ヘチマ衿制服を壊って、セーラー服
を着る方もふえてきました。私も田舎に生地があるからと、
セーラー服をたのみ、やっと女学生らしい服装に。そして嬉
しく通いましたものつかの間、その当時のスワリ生地であ
ったため、毎日着ておられますうち、よれよれとなってい
ましたのです。淋しい淋しいことでした。

Fig. 13-2

小川 幸子
池田 英美

Fig. 13-3



Fig. 14 Monpe

3-5. 終戦後から今日に至る通学服

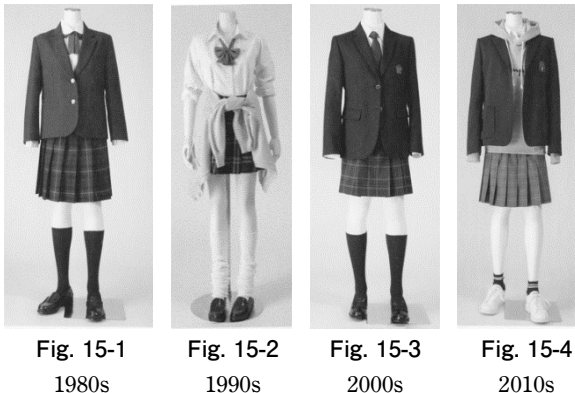
(1946(昭和21)年~2010年代)

戦争が終結した後は、学校教育の制度が大きく変化したことにより、多くの中学校が制服の導入を始めた。1960年代から1970年代には、学生運動などによって自由化の動きが活発し、制服に対する反発感からスケバンスタイルなどの制服改造が行われた²⁹⁾。1980年代になると、男女に統一感を持たせるブレザー式制服が登場したことにより制服のモデルチェンジが起り、その後、全体の約8割の高校がFig. 15-1³⁰⁾に示すような制服を採用したようである。1990年代には、制服の色合いに、茶色、緑色、灰色などのバリエーションが生まれ、全体的に派手で華やかな制服姿が一般的となった³¹⁾。当時は、「可愛い」制服が生徒集めの手段にもなり、制服のモデルチェンジが加速していった³¹⁾。1990年代後半になると、Fig. 15-2³²⁾に示したように非常に短いスカート丈とルーズソックスと呼ばれる靴下を着用するコギャルスタイルが登場し、1960年代から1970年代の制服改造とは異なる制服の着崩しが流行した。2000年代になるとコギャルブームが終息し、Fig. 15-3³³⁾に示したようにスカートはやや長めの膝上丈になり、落

(3) 戦時下のモンペ

第二次世界大戦下においては、教育の戦時体制は強化され、1942(昭和17)年には国民勤労報国令施行規則に基づいて学徒出動命令が出され、学徒の勤労動員が始まった。その後の戦局の進展は学校教育に

ち着いた色合いの清楚なスタイルが好まれるようになった。2010年代では、Fig. 15-4³⁴⁾に示したようにパーカーやスニーカーなど自由なスタイルが登場した。このように、戦後から現代に至る女学生の通学用の制服は、女学生の制服に対する意識も目まぐるしく変化してきている。



Modern School Uniforms

戦後の制服の変遷は、戦前の制服に求められた機能面や衛生面、経済面というよりも、外観が重視され、意匠面において大きな変化が見られるようになったと言える。また、昨今の学校制服はTable 1³⁵⁾に示すように、生徒、保護者、学校によって制服に対するニーズが異なることも明らかである。制服が制定された当時の1930年代は、制服が所属を表す機能を持っていたが、現在では同じ制服でも着装の仕方に個性が表れ、校則はあるものの、制服が私服化し、所属を表す機能に加え、個性を表現する手段として用いられる場合が多いようである。一方、伝統的に制服のない学校では、学校側が服装を管理するのではなく、生徒主体で服装の風紀を決定することを大切にしており、その結果、生徒は勉学に相応し

い自由な服装で通学しているようである。

4. 制服を制定しない女学校の例

制服を制定しない学校の通学服の現状について、日本女子大学附属校の通学服を例として検討した。日本女子大学校の卒業生団体の桜楓会の機関紙『家庭週報』を資料とした。ちなみに、『家庭週報』とは、学内だけではなく、社会の婦人たちを啓蒙することを目指した情報媒体であった。そこで、本研究では、1904年の創刊から1951(昭和26)年の終刊までの見出し³⁶⁾から、「女学生」や「学生服」、「服装」の文言を抽出し、それに該当する「服装」や「制服」に関わる記事を用いて、通学服に対する状況を検討した。

1901(明治34)年に開校した日本女子大学校附属高等女学校(以下附属高等女学校と記す)は、開校当初から決まった服装はなく、1905(明治38)年には、多くが木綿手織綿の地味な服装をしていたとの記述³⁷⁾がある。この時代は、前項で述べた女袴と改良服が着用されていた時代であった。

また、1916(大正5)年の婦女新聞³⁸⁾には、「(前略)私はなるたけ個人の自由を尊重し、(中略)自分の自由意志によって決断し決行させたい(中略)学校には各階級の人が集まり金持ちの娘も来れば貧しい人の子も入学しますから、こんなことは生徒の自由にかかせ、むしろこの機会を利用して、各自に自分の地位や境遇から判断して最も自分にふさわしい服装をする習慣を養わせたい(後略)」と、二代目校長麻生正蔵が記している。このように附属高等女学校では、世の中が女袴ブームになり制服化の動きを見せていた中で、制服による一律化を図るのではなく、通学服には、個人の自由を尊重し、自らの地位や境遇から自分に相応しい服装を考えさせるという自由さと思慮深さを養うことを学生に望み、通学服は、自分に相応しい服装であることを大切にしていたことがわかる。

関東大震災時は、和服の素材の選定に対して、学校側が提示した記録³⁹⁾があるが、服装は自由であった。戦時下においては、制服制定の動きがあったものの、制定されることはなかった。その後、セーラー服を着ている附属高等女学校女学生の写真を観ることができたことから、今後、その間の経緯を調べる必要がある。1948(昭和23)年に新制の高等学校になると、附属高等女学校の制服は、1947(昭和22)年に開校した新制中学校に受け継がれ、高等学校は制

Table 1 Needs of modern school uniforms

(繊維製品消費科学, 59巻6号, 451-455 (2018)掲載図を改編)

	生徒	保護者	学校
1	清潔	清潔	デザイン
2	寒暖対応	寒暖対応	清潔
3	デザイン	成長・サイズ	着こなし
4	着心地	着心地	着心地
5	成長・サイズ	デザイン	耐久性
6	安心	安心	経済性

服のない状態に戻り、生徒自らが通学服に関して風紀を整えるようになった⁴⁰⁾という記録がある。このように、現在の附属高校の通学服のスタイルは、1916年の校長の服装に対する考え方を現在も伝統的に受け継ぎ、生徒自らが服装を律しているようである。この例のように、通学服として制服を設定していない学校は、学校側が服装に関する風紀を律するのではなく、生徒主体で通学時の適切な服装の風紀を決定していることが明らかとなった。これより、制服の無い女学校において、自由な服装が成立している理由を知ることができた。

5. まとめ

女学生の通学時の服装問題は、女子教育が重要視されるようになった学制とともに始まったと捉えることができる。

最初に女学生の象徴とされた服装は、男袴であった。活動的であるが、女学生の服装として馴染まないことから批判を受け、廃止された。その後、西洋スタイルとして流行していたバスルススタイルが着用されたが、身体衛生上の問題や価格の点から女学生の服装として定着するには至らなかった。次第に女子教育が整うにつれ、女学生の勉学に必要な運動機能性と審美性を兼ね備えた衣服として女袴が出現し、女学生らしい通学服として評判も良かった。さらに、女袴に、着心地や使い勝手の良さ、ならびに経済面からの改良が加えられ、より動作がしやすく、体育の授業にも対応できる通学服が作られた。

女子教育がますます普及していくに伴い、女学生の服装は和装から洋装となり、ワンピース型やツーピース型のセーラー服が流行した。その後、戦争の激化によって物資不足や経済的不安定な中、通学服には安全性や動きやすさの機能が重視されるようになった。女学生はそのような状況においても、制服に憧れ感を持ち、そのためには清潔感や耐久性が求められた。さらに戦局が進むとモンペスタイルとなり、通学服には審美性よりも安全性や作業性が重視された。制服が制定された当時の1930年代は、制服が所属を表す機能を持っていたが、現在では同じ制服でも着装の仕方に個性が表れ、校則はあるものの、制服が私服化しつつある。制服は、従来からの所属を表す機能が基本となり制定されているが、着用者においては、その意識よりも個性を表現する意匠面からの機能の要求が大きくなっている。

一方、伝統的に制服のない学校例では、学校側が服装を管理するのではなく、生徒主体で服装の風紀を決定することを大切にしており、その結果、生徒は勉学に相応しい自由な服装で通学していることがわかった。

このように、女学生の通学服に求める機能は、時代の状況に合わせて優位性が異なり、機能面、衛生面、経済面、意匠面の順に訴求される機能が変化してきたことがわかった。

6. 参考文献・資料

- 1) 文部省：学制百年史(資料編)、ぎょうせい(帝国地方行政学会)、496-497 (1972)
- 2) 同上、341 (1972)
- 3) 同上、484-489 (1972)
- 4) 文部省：日本の成長と教育－教育の展開と経済の発展－、帝国地方行政学会、43 (1962)
- 5) 文部省：学制百年史(記述編)、ぎょうせい(帝国地方行政学会)、2 (1972)
- 6) 谷田闕次、小池三枝：日本服飾史、光生館、176 (1989)
- 7) 国立国会図書館リサーチ・ナビ 第148回常設展示 女學生らいふ、3 (2009)
- 8) 読売新聞 朝刊、1875年10月8日
- 9) トンボ学生服 ミュージアム 日本の学ぶスタイルの変遷(最終閲覧日：2019年5月7日)
http://www.tombow.gr.jp/uniform_museum/style/style03.html
- 10) お茶の水女子大学 デジタルアーカイブス
http://archives.cf.ocha.ac.jp/exhibition/g_ph/g_ph188607-0016.html
- 11) 尾崎恵：日本の洋装化にみる和服地の使用について、文化学園大学紀要 服装学・造形学研究 44、127 (2013)
- 12) 同上、128 (2013)
- 13) 灘波知子：学校制服の文化史 日本近代における女子生徒服装の変遷、株式会社大洋社、61-77 (2012)
- 14) 学園法人跡見学園 跡見学園の歩み 制服(最終閲覧日：2019年5月7日)
http://www.atomi.ac.jp/progress/visual_identity/uniform.html
- 15) 灘波知子：第3回 衣服をめぐる「和」と「洋」の相克・融合－豊かな文化の構築に向けて－、

- 明治時代の生活に学ぶ(国民生活)バックナンバー, No.67 2月号 (2018)
- 16) 文化遺産オンライン 裁縫雛形 改良袴(最終閲覧日:2019年10月16日)
<http://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/263379/2>
- 17) 灘波知子:学校制服の文化史 日本近代における女子生徒服装の変遷, 株式会社大洋社, 95-112 (2012)
- 18) 渡辺滋:渡辺式改良女袴製作法(国立国会図書館デジタルコレクションより), 東京裁縫女学校出版部, (1914)
- 19) 森伸之(監修):ニッポン 制服百年史, 株式会社河出書房新社, 16 (2019)
- 20) 同上, 16-19 (2019)
- 21) 内田静江:セーラー服と女学生, 河出書房新社, 31 (2018)
- 22) 森伸之(監修):ニッポン 制服百年史, 株式会社河出書房新社, 26-27 (2019)
- 23) 増田美子(編者):日本衣服史, 株式会社吉川弘文館, 347-350 (2010)
- 24) 灘波知子:学校制服の文化史 日本近代における女子生徒服装の変遷, 株式会社大洋社, 315-317 (2012)
- 25) 文部省例規類纂 第7巻, 大空社, 36(第六類 學生生徒卒業生及兵役) (1987)
- 26) 同上, 37-39 (1987)
- 27) 日本女子大学附属女学校 45 回生西組一同:百合樹の陰に過ぎた日, 45 回生西組 記録の会, 21, 45, 66 (1997)
- 28) 毎日新聞 2012年7月19日(最終閲覧日:2019年10月10日)
<https://mainichi.jp/graphs/20161227/hpj/00m/040/003000g/1>
- 29) 森伸之(監修):ニッポン 制服百年史, 株式会社河出書房新社, 39 (2019)
- 30) 同上, 83 (2019)
- 31) 同上, 84 (2019)
- 32) 同上, 86 (2019)
- 33) 同上, 88 (2019)
- 34) 同上, 89 (2019)
- 35) 原田季典:学校制服の過去, 現在, 未来~社会・教育・消費者の変化と共に~, 繊維製品消費科学, 59巻6号, 451-455 (2018)
- 36) 中嶋邦(監修):女性ジャーナルの先駆け 日本女子大学校・桜楓会機関紙 家庭週報 年表, 日本女子大学教育文化振興桜楓会出版部, 30-260 (2006)
- 37) 日本女子大学若葉会:若葉会のあゆみ 年表~明治三十四年~昭和二十三年~(非売品), 日本女子大学若葉会, 5 (1989)
- 38) 各自の自由に:婦女新聞, 婦女新聞社, 1916年2月15日
- 39) 日本女子大学若葉会:若葉会のあゆみ 年表~明治三十四年~昭和二十三年~(非売品), 日本女子大学若葉会, 21 (1989)
- 40) 日本女子大学附属高等学校三十年史編集委員会:日本女子大学附属高等学校三十年史, 日本女子大学附属高等学校, 100-137 (1983)